

「サーフィンと生きるまち」 —東京五輪で活性化へ新機軸

馬淵 昌也

千葉県一宮町長



まぶち・まさや

1957年11月1日生。栄光学園中学・高校を経て、1980年東京大学文学部卒。1988年同大学院人文科学研究科博士課程中国哲学専門課程中途退学。2006年駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻博士後期課程満期退学。1988年東京大学文学部助手。1991年専修大学経済学部専任講師。1993年同助教授。1998年学習院大学外国語教育研究センター教授。2016年3月同退職。2016年5月一宮町長選で当選。2020年5月、再選。

房 総半島九十九里浜の一角に位置する千葉県一宮町は、年間約60万人のサーファーが良質な波を求めて訪れる国内屈指のサーフィンのまち。「東京2020オリンピック競技大会」のサーフィン競技開催会場に決まったことと前後して、一宮町はまちづくりの基本方向を「サーフィンと生きる町」と定め、総合戦略として「一宮版サーフォノミクス」を掲げた。移住・交流人口を増やそうと、歴史ある古いまちにサーフィンと仕事を楽しむシェア・オフィスを設置したり、サーフストリートの整備を図るなど、まちの新たな活性化を図る同町の馬淵昌也町長に話を聞いた。



一宮町の概要

千葉県一宮町は、ゆるやかに弧を描く九十九里浜の南端に位置する風光明媚で気候温暖なまち。総面積は22.99km²、その大半を肥沃な田畑や山林が占め、四季を通して緑に包まれている。古くは、上総一宮1万3,000石の城下町として栄え、その後は日本一と称されたガラス温室団地など、ハウス栽培を中心とした近郊蔬菜果樹園芸を基幹産業として発展。近年は、恵まれた自然条件のなか東京近郊屈指のリゾート地として観光客を集める。東京駅からJR特急で直通約60分という便利さから首都圏への通勤圏としても注目されている。

一宮町の魅力は 小さなエリアの多様性

——一宮町のまちの概要について教えていただけますか。

馬淵 一宮町は千葉県九十九里南端に位置し、温暖な気候に恵まれた町です。面積は約23km²、人口は約1万2,000人と小さな町です。

歴史的に、一宮町は平安時代にはすでに^{たまき}玉前神社の存在とともに東上総地域における政治・経済・文化の中心地であったと考えられます。また、水運を通じて内陸と海の物流が結びついて都市の集積が起こり、昭和の末年まで長く日常消費の拠点でもありました。景勝地として多くの名士の別荘が立ち並んで「東の大磯」と称された時代もありましたし、玉前神社の参拝客の増加を背景に、観光消費への転換が進んできたという経緯もあります。

現在の一宮町の特徴は、この小さいまちの中に多様なものがぎゅっと詰まっているところにあります。自然についていえば、海も山も川もあり、町の東端には太平洋に面して7kmにわたる海岸線が広がっています。古くは地引網漁業で栄え、昭和時代までは海水浴の景勝地として有名でした。南北にわたってすぐれた波の立つたくさんのサーフポイントがあることから、現在では年間を通じたサーフィンの拠点として知られています。

また、町の中央をJR外房線と国道128号線が南北に貫き、海から鉄道・国道までは広大な平地で、



観光地引網

主に農地や宅地として利用されています。農業は町の基幹産業であり、トマト・メロン・梨を中心にブランドが確立していますが、率直なところ、近年は生産額・生産者数ともにやや衰退気味です。

一方、現在の住民の経済生活には主にふたつのグループがあります。自営業者、玉前神社周辺や新たに形成された海岸部で商業を営む方々といった地元で働くグループであり、もうひとつは交通の便がよいことから東京・千葉方面へ働きに行き、ベッドタウンとして生活されている勤労者の方々のグループです。

つまり、一宮町は自然豊かで、伝統的な風格を備える商業地とモダンな外国文化の風情を楽しめ、かつ都心にも近い魅力に溢れたまちといえます。



梨栽培（上）と商店街（下）



^{たまき}上総国一之宮・玉前神社

「サーフォノミクス」で目指す 確かな経済効果

——一宮町は以前からサーフィンが盛んでしたが、まちづくりの基本戦略を「サーフィンと生きる町」としたのはなぜですか。

馬淵 一宮町では1970年代からサーフィンが行われるようになり、最初のサーフ・ショップCHP（日本の老舗サーフボード・メーカー）が海岸沿いの県道にできたのもそのころです。しかし、当時、サーフィンを楽しんでいたのは来訪者がほとんどで、田畑にゴミを捨てたりして地元からあまり歓迎されることはなかったといえます。それでも、ブームとともに一宮の波を求めてサーファーは増え続け、現在、一宮の海岸を訪れる人は千葉県推計では年間約60万人に上っています。

そうしたことから、当初は芋畑と松林が広がるばかりだった海岸沿いの県道は、サーファー需要を中核とした多数のサーフ・ショップ、レストラン、カフェなどが林立し、一宮町の第2の商業地を形成するに至りました。さらには、生活のなかでサーフィンを楽しもうとする移住者も増え、新しい自治区も設立されるまでになっています。

このように、一宮のサーフィン土壤は自生的に発達してきたわけですが、それを行政が横目で見ているのではなく、その動きを正面から見据え、一宮町存続のための行政戦略における中心トピックとして考えるようになりました（「一宮町まち・ひと・しごと創生総合戦略」）。その移住戦略のな

かで出てきたのが「サーフィンと生きるまち」のコンセプトです。その考え方を広めようと、町ではパンフレットや動画で盛んにPRしているところ です。

——その中心概念である「サーフォノミクス」とはどのようなものですか。

馬淵 サーフォノミクスとは「レーガノミクス」に倣った、「サーファーが集まることによる経済効果」を表す造語です。柱はふたつあって、ひとつはサーフィンそのものが持つ集客性を維持・向上させる戦略、もうひとつはサーフィン由来の経済効果をサーフィン以外の回路にも結合・回流させる戦略です。

まずひとつめですが、国内のサーフィン人口は実は頭打ちで、将来への不安があります。そこで、サーフィンの魅力の紹介や実践への誘導を通じて一宮町がその最も優れた適地であることを理解していただき、来訪吸引力を維持・強化することを考えたわけです。「サーフィンセンター」（官民連携で設置するサーフィン総合施設。託児所やカフェを併設し、プロサーファーのライフガードによる海の安全情報発信、町内観光・飲食店情報の提供などを行う）はそのなかから生まれたプランです。移住を促す「お試し住宅」もその戦略の一環です。

もうひとつは、サーフィン需要による人の流れ、経済効果を他の回路に直接波及させていくことを目指したもので、玉前神社にほど近いまちなかに設営したシェア・オフィス「SUZUMINE」はその象徴です。



海岸のサーフストリート



上総一宮駅前の観光案内所（上）では
自転車とサーフボードが借りられる（下）



サーファーを魅了する一宮の波

——単なるサーフィン活用ではなく、まちの生活や文化を変えることで定住・交流人口を増やそうとしているように見えます。

馬淵 まずは一宮町におけるサーフィン活動そのものの活力維持、もうひとつが既存の他の文脈とサーフィン文脈の結合を目指しているわけです。結果的に異種のもので交錯するなかで、新たな共同性や生活スタイルが生まれることを期待しています。実際に、農業をしながらサーフィンを楽しむ移住者も生まれています。

町では転入者の方々からアンケートをとってその動向を分析していますが、直近のデータでいえば、2020年4月1日から2021年9月30日までの1年半で390人が入ってこられました。その年齢別内訳では、全体に占める10～30代の若い世代の割合が多いこと（57.4%）、本人または家族のなかにサーフィンをする人の割合が高いこと（50.5%）、転入後の勤務地が一宮町にある人が約4分の1に上ること（27.3%）がわかっています。さらに、居住地として一宮町を選んだ理由をズバリ尋ねると、「豊かな自然環境がある」（48.4%）、「サーフィンができる」（39.0%）、「都心への交通アクセスがよい」（27.2%）、「住居にかかる費用が

手ごろ」（25.3%）などとなっています（いずれも複数回答あり）。

したがって、私はこれらの回答からも「サーフォノミクス」の方向性の正しさが示されているのではないかと考えているところです。

東京五輪競技開催地決定も
コロナ禍に揺れる

——一宮町の釣ヶ崎海岸が東京オリンピック・サーフィン会場に決定したのは2016年12月でした。そのことは馬淵町政の展開にどう影響しましたか。

馬淵 開催が決定したのは2016年12月8日のことでした。オリンピックという世界的なイベントを本町で開催することになったわけですが、私の方針としては過大でも過小でもなく、多くの町民に納得していただける事業規模でコントロールしていかなければいけないという思いが強くありました。はしぎすぎも醒めすぎも排して、町としての適正な事業規模や支出レベルを職員たちと議論して決めていったのです。

その意味でも、オリンピック関連業務は明らかに外部要因による純増の事業となりますので、従来の必要な事業への圧迫を生じさせないようにすることは常に意識していました。とくに、かねてよりの町の宿願だったJR上総一ノ宮駅東口の開設の可能性がオリンピック到来に絡んで見えてきましたので一気に前に進めたかったのですが、費用面で地元負担がどの程度になるかなどには大いに頭を悩ませました。

端的に言えば、オリンピックを契機に本来私がやりたいと考えていたことをより早く進められたこと、逆に後回しにせざるを得なかったこと、いずれもありました。

——オリンピックに対する町民の期待や職員の皆さんの士気はいかがでしたか。

馬淵 おそらく町民の大多数の方は肯定的に受け止めていたと思います。なかには批判的な方もいましたが、ごく少数だったと言えます。むしろ、開催地元として、オリンピックと前向きな関わりを深めたいとお考えの方が多かったのではないのでしょうか。

職員も私と同様、過大な財政支出に対する警戒感があったと思いますが、基本的には大多数の皆

さんが肯定的・積極的にとらえていました。準備を行う中で、高い士気も感じられたところです。
——会場決定から準備期間のご苦心、コロナ禍による1年延期の影響はいかがでしたか。

馬淵 当初は町の行政や町民の方々がどうオリンピックに向き合えばいいのかがはっきり見えなかったことに困りました。なにをどれだけやればいいのか、あるいはやれるのか。それを確定させるまでにずいぶん時間がかかり、ストレスがたまりました。

やがて、実はほとんどすべての業務はオリンピック組織委員会が行うのであって、町や町民の出番はほとんどないとわかったときは拍子抜けしたのです。一方、将来への布石として町の小中学生たちが全員会場で観戦できるようにすることを願い、紆余曲折を経ながらも千葉県のご協力をいただくなかで可能になったことはたいへん嬉しいできごとでした。

そうしたなかで、残念ですが新型コロナウイルスの感染拡大によって開催が1年延期となりました。そのこと自体は、私も妥当な判断だったと思います。しかし、その1年を待つ間、小さな町ではコロナ禍に向き合うなかで、オリンピックに対する盛り上がりや欠けようとしていた難しい時期もありました。それでもその空気を吹き飛ばしてくれたのが、町の住民である大原洋人さんでした。大原さんがサーフィン競技のオリンピック出場権を獲得してくれたことで、再び町民の気持ちを掻き立ててくれたのです（本番では準々決勝まで進出）。

そしてようやく迎えたオリンピック本番でしたが、無観客開催となり、町民も小中学生も観戦できず、来訪者も限りなくゼロでした。したがって、オリンピック開催の事実は町の歴史にずっと残るものでありがたい限りではありますが、本来期待していたインパクトからすれば、たいへん残念な結果に終わったと言わざるを得ないのです。

大事なのはこれから ——環境整備に力を注ぐ

——経済効果等はいかがでしたか。

馬淵 コロナで無観客、外出自粛になりましたので、本大会における経済効果は、選手や関係者が宿泊した施設のみに限られました。コロナ来襲前は、WSL（World Surf League）のQS6000大会な

ど、サーフィン関係のイベントをはじめ、一宮町への来訪者は増加して各方面でそれなりの経済効果は確認されていましたが、コロナでその伸びは鈍化してしまいました。

ただ、たしかにオリンピックによる直接的な効果は限定されましたが、知名度が大きくアップしたことは町にとって大きなプラス材料です。外部とのさまざまな会合などで初めての方と挨拶すると、「ああ、あのオリンピック会場の…」と返されます。また、サーフィン需要を背景にした住宅やアパートの建築はコロナ下でも一貫して増えており、先般公表された2020年度分の路線価では、一宮町の海岸部は商業地・住宅地ともに県内一の伸び率を示しました。この勢いを失ってははいけません。

——オリンピックが終了した今、ブームを一過性に終わらせないためになにをされますか。

馬淵 オリンピック開催地としての来訪者は、これからそれなりの間続くと思います。ですから、その方々の訪れたときの記憶をより良好なものにすることでリピーターとなっていただけるように、釣ヶ崎海岸に自然公園を開設したり、その周辺には道の駅的施設を配置することなどの環境整備を考えています。また、釣ヶ崎海岸そのものは、オリンピックで初めてのサーフィン競技開催地として今後も各種のサーフィン大会などが開かれるでしょうから、そうしたイベントには町として広報などで支援していこうと思っています。

また、サーフィンではありませんが、今後の重点課題として防災や教育等への取組みがあります。一宮町は潜在的に、地震と津波、大型台風等の際の川の氾濫と土砂崩れなどの災害リスクを抱えていますから、生命に直結するこれら課題への取組みは最優先です。また、私自身が大学教員を長く務めていたこともあって、子どもさん方の教育水準の向上にはさらに力を注いでいきたいと考えているところです。

いずれにせよ、大事なのはこれからです。アクセスに恵まれた利便性ととも、「サーフィンと生きるまち」が社会に広く認知され、気軽に訪れて楽しんでいただけるよう、これからも努力していきたいと思っています。

——ところで、馬淵町政の特徴には“わかりやすさ”があると思います。HPの「わかりやすい予算書」（まちでは今年こんな仕事をします）や「幹

部職員紹介」「町長室開放日」の意図をお話しいただけますか。

馬淵 これらはいずれも先進自治体の取組みに学んで前町長の時代から始まったものですが、私もその趣旨には賛同していましたので続けています。住民が身近に理解できる予算書、まちの行政を中心になって牽引する幹部職員の町民への挨拶は、行政を町民に身近にするための大事な手段です。行政には政策の意思決定について町民への説明責任がありますし、首長は求められる前に常に積極的にお知らせしなければいけません。私はその責任を果たすことで、町民の方々にわかりやすい町政をお届けしたいと考えています。

同時に、責任者として町政をお預かりしている町長と町の主人公である町民の皆さんとの距離も、できるだけ近くにあって等身大であるべきだと考えており、それを常に心がけて実践に励んでいるところです。

郷土の先達、加納久宜公に学ぶ

——その考え方の基礎には郷土の偉人、加納久宜公の教えがあるのでしょうか。

馬淵 そのとおりです。幕末に一宮藩主だった加納久宜公は、明治になって、新潟学校校長、貴族院議員などを経て、鹿児島県知事に転じ、西南戦争以降の後遺症や内部抗争に悩む県の産業振興や教育の向上に力を注いで大きな成果を上げました。退任した帰京後は、東京都下入新井村（現大森）を拠点に、入新井信用組合（現城南信用金庫）、帝国農会、東京競馬会などの設立にかかわり、産業振興に努めました。その後、明治末年になって、一宮町民の懇請に応じて今度は町長に就き、それまで蓄積したすべての知見を投入し、一宮を「全国模範町村」と称されるまでに声価を高めています。

この久宜公の生涯を見ていくと、「国の繁栄の礎は、地方・地域の繁栄にある」との信念のもと、中央政治よりも地方政治を重んじ、地域の発展に全身全霊を傾けていたことがわかります。また、まだまだ身分制度の名残があった時代に、「お前たちにも意見があるだろう」と使用人たちを座敷に上げてその話に耳を傾けたといえます。

私はその姿勢に深く共感しますし、尊敬もして



バックボードと加納久宜の書

います。先年、町の広報用に航空写真をベースにしたバックボードをつくりましたが、そこに久宜公の書「仁以山悦 水為智歡」「仁徳ある人はどしりとした山を楽しんで長生きする 知恵ある人は川の流れを楽しんで過ごす」（中国・晋の王済の詩の一節。『論語』雍也篇の「知者乐山、仁者楽水」にもとづく）を写し込みました。

折に触れて、久宜公の功績に思いを馳せつつ、その人徳をしのばせていただいています。

——最後に、これからを担う自治体職員に対するメッセージをお願いします。

馬淵 自治体職員の皆さんには、まず公に携わる任務の重さを感じていただきたいと思います。なぜなら、自治体業務は地域の暮らしにきわめて重要な位置を占めることから、能力に恵まれ、意欲も高い人材に担っていただかなくてはなりません。地域の要望に応えるとともに、まちをよくしたいと願う住民の気持ちにも寄り添っていくことが大切です。

自治体の主人公はあくまでも住民の皆さんであり、その暮らしを守り、増進していくのが自治体職員の仕事だと思います。なにが住民のみなさんのプラスになるのかを中心に考えて行動し、身を処していただきたいと思います。

逆に、公務員としての仕事のやりやすさ優先やリスクを恐れての責任回避は芳しくありません。とくに人口が減り、高齢化が進むこれからの日本では、地域を支えるのに行政回路の重要性がますます高まると思います。繰り返しますが、地域には責任感を持った有能な人材が求められています。自らの使命を自覚し、常に上を目指して努力する職員であっていただきたいと思います。